

豊前崇廓師の教学及び行実に関する一試論

恵美智生

近世真宗教学史に於いて、学派分裂は僧樸門下に始まり、中でも空華学派の僧谿、芸轍の慧雲、豊前の崇廓は僧樸門下の上足といわれる。しかし崇廓に関しては学説の検討を始め、必ずしも教学史上の位置付けが明瞭ではない。よって本論稿では、崇廓の行実と講録等を検討し、教学史上の位置付けを考察するものである。

崇廓の行実については、『本願寺通記』所説の「遺行」に関しての考察が再評価の鍵をにぎると考えられる。近世に本山と末寺の関係を記したものに諸国諸記がある。その中「豊前国諸記」の記述によれば豊前四日市別院創始後に「廣大會」と呼ばれる地方に於ける教学研究の場が創設され、崇廓はその初代講師となつて在野学僧の教化を担っていた事績に関するものとは考えられないだろうか。『六要鈔助覽』に見られる崇廓の学説は、『六要鈔』で直接解釈されていない宗祖の御自釈に関して自説を展開することで存覚上人の「行巻」理解の真意を開顕せんとする姿勢が分かる。崇廓は「能所不二」という言葉こそ明確に使用していないが行信理解に於いて、称名も名号ともに大行と位置付け、信行不二の立場から大行論を立てることは、豊前学派の教学の成立過程に於いて、能所不二の能行説を思想的に胚胎するものと考えられるのではないだろうか。『傍観正

偽編』については、従来その著述の史実により一旦三業派に属すと見なされてきた評価は一面的であると言える。何故なら三業帰命説を暗に批判し更に『古二十邪義』の中で三業帰命説を異義邪執と位置付けている点からも積極的に三業派に同調したものとはいない。むしろ学林の命によって論駁せしめられたとみるのが穏当な見方であつて、三業惑乱期に学林に立場を置く中での崇廓の苦心の行実が窺えるからである。以上の事から崇廓は、地方では学僧教化の指導的立場を担うとともに、豊前学派の大行論の思想的萌芽は崇廓にみられるものと考えられる。一方、学林に立場を置く中で三業帰命、欲生正因説が学林伝統の正義の説として扱われ、当時の能化及び学林が絶対的な教権を掌握し三業帰命説をもって学林を統制せんとする三業惑乱の伏線といえる動向が師の行実と思想から反顕され得るのではないだろうか。

(1) 国東利行著『豊前四日市東西別院の歴史』には「御坊之義崇廓已来不絶 講師相統被 仰付候事に御座候」とある。一二二頁参照。

(2) 『六要鈔助覽』には「撰諸善法」等とは、名号所具の法にして一声称念、自成しここに住するが故にもつて称名を大行とす。何をもつての故に名義相応す。名体不二なるが故に。(六丁左)「念仏」とは、尋常の名、転釈し六字を挙ぐ。

(中略)「正念」とは、(中略)一念無疑を正念とす。これ信に約し結釈す。すなわち信行不二の義を彰す」とある。(八丁右)

(3) 『傍観正偽編』には「欲生の顕著につきて一念帰命を明

かす、ただ己の意業の所得なり。(中略)身口の表頭をそろえざれば一念帰命を成ぜずというにはあらず」とあり、身口意の三業は帰命の一念に並具せずと明かす。(三丁右)

(4) 崇廓師述『古二十邪義』一丁右、三丁左参照。『古二十邪義』には、真宗相承の中で、古来より当時の邪執異計を略述して二十種の異安心を挙げて正統の安心に非ざることを示し、口業、意業頼みを異安心と位置づけている。

親鸞の「浄土」について

加藤 智見

哲学や倫理と異なる宗教の特質はどこにあるのか、という角度から、今回は親鸞の「浄土」のとらえ方を取り上げ、考えてみたい。

親鸞の浄土のとらえ方を調べていくと、少なくとも次の三つのとらえ方があると考えられる。第一に、浄土は現世の今、ここで出会い体験する世界であるというとらえ方。第二に、肉体の死後、煩惱から解放されておもむく世界というとらえ方。第三に、信心が不十分で疑いがある場合、仮の浄土に入り、不信の罪を償ってから生まれる世界という三つのとらえ方があると思えるが、なぜこのようなとらえ方をしたのであろうか。

第一のとらえ方は、従来の浄土が死後に往生する場にとらえられてきたのに対し、たとえば「信心のさだまるとき往生また

さだまるとなり。来迎の義則をまたず」(『末燈鈔』)とし、浄土を死後のものとしないうとらえ方である。さらには「光明寺の和尚の『般舟讚』には、信心のひとはその心すでにつねに浄土に居すと釈したまへり。居すといふは、浄土に、信心のひとのころつねにゐたり、といふころなり」(同)と述べるように、信心を得る今、すでにそこに住む世界であるという。このようにとらえ方から考えられることは、死後ではなく今ここで実感し、体験できる浄土であり、今ここでの救済が志向されていることである。未来ではなく現在の救済が彼の関心の的になっているという点である。

しかし第二に、次のようなとらえ方がある点に留意したい。「なごりをしくおもへども、娑婆の縁つきて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまひるべきなり」(『歎異抄』)。いわゆる死後往生による浄土のとらえ方である。なぜ第一のとらえ方と矛盾するようなことがいわれるのか。彼によれば「真実信心のひとは」「ころはすでに如来とひとし」(『末燈鈔』)いのであるから、今、浄土に住み得るはずであるが、人間は煩惱に支配され、なかなかそれができない。そこで肉体の死後、今度は真の浄土に参らせていただくというとらえ方をするのである。このようにあえて矛盾するようなことをいうことに、私はかえって親鸞の宗教性と宗教の特質を見たい。理論的には生きて浄土を体験できるはずであるが、凡夫にはそれができない。しかし、できないからといって否定したり切り捨てたりせず、死後往生のあり方も包容していくのである。このように浄土に住み切れない今の挫折感、住み切れないで死を迎える未来への